

## 2. 公開講座「格差とは何か」 池田まさみ（お茶の水女子大学人間発達教育研究センター）

本講座は、グローバル COE 人間発達科学演習（大学院授業）の一環として、「格差とは何か」をテーマに、3つの格差領域（①国際的格差、②教育・社会的格差、③養育・環境格差）から、各領域の研究担当教員による講義（オムニバス形式）を行った。受講者総数は272名であった。

### 第1回 国際的格差領域 6月14日（土）13：30－16：45 本館3階306室

司会 内田伸子 先生

#### 講義① 榊原洋一 先生 『日本の経験を発展途上国で生かす』

小児科医としてアジアやアフリカでの国際医療協力事業に携わってきた経験から、国際協力をを行ううえで必要な視点について私見を交えながら述べた。適正技術、持続可能性といった基本的な援助内容と、被援助国であった日本の経験の意味などについて強調した。

#### 講義② 大森美香 先生 『格差とはなにかー健康心理学からのアプローチ』

「格差」を社会経済的地位 (SES) の差異としてとらえ、健康心理学的な視点からSES がいかに健康に関連するかを論じた。「健康」な社会の実現のため、健康行動の理論をアクションに変換し、介入の実践および政策策定に働きかけていく必要があり、領域横断的な取り組みが必須である。

### 第2回 養育・環境格差領域 6月21日（土）13：30－16：45 共通講義棟2号館101室

司会 菅原ますみ 先生

#### 講義① 篁 倫子 先生 『発達障害の子どもと教育・養育』

障害は「格差」を生じさせる要因である。知的障害、自閉性障害、学習障害、注意欠陥多動性障害などの発達障害のある子どもたちが被る格差を最小限にとどめるために、適切な教育支援や養育が必要となる。講義では発達障害とわが国の特別支援教育を概説すると同時に、極低出生体重児と発達障害に関する演者の長期追跡研究の結果を紹介した。COE 研究では発達障害の子どもへの社会的認知・医療保健・教育の国際比較、および、子どもの養育環境と

親のQOL等について実態調査を行う予定である。

講義② 小西行郎 先生 『発達障害児は造られる』

最近急激に増加している発達障害について、その原因として新自由主義による、成果主義や効率主義の導入によって作り出されたものではないかと考えた。こうした子どもたちは親の育て方や環境の変化によって起こるのではなく、異質なものを受け入れられなくなった日本社会の変化によるものであると考えられる。それはアメリカやイギリスの発生頻度がスウェーデンのそれとあまりにも違うことからみとれる。つまり発達障害は社会によって造られたものといえるのではないだろうか？ 発達障害の診断方法のあいまいさがそれを許したのではないかと思われる。新しい科学的な診断方法の確立が必要であろう。

**第3回 教育・社会的格差領域** 6月28日(土) 13:30-16:45 共通講義棟2号館101室  
司会 耳塚寛明 先生

講義① 耳塚寛明 先生 『学力格差への接近〈問い〉から考える』

だれが学力を獲得するのか。それは、教授学的な問いであると同時に、人々の地位達成過程を明らかにし、また社会成層(social stratification)の有り様を理解する上で、欠くことのできない社会学的な問いでもある。この講義では、この問いに関わる社会学的課題を整理し、またJELS (Japan Education Longitudinal Study) を用いて実証的な検討を行った。

講義② 小玉重夫 先生 『格差社会と能力主義：教育思想の視点から』

この講義では、格差社会と能力主義の関係を教育思想の視点から考察した。まず、格差社会をジル・ドゥルーズが「規律社会から管理社会への移行」として概念化した社会的文脈の中に位置づけた。そしてそれをふまえて、格差社会における能力主義はもはや社会的包含の機能を十分に果たすことが困難になり、社会的排除層を生み出しつつあることについて考え、議論した。